

Epiphanies

その瞬間

No.11

羽生先生の後を、 裸足で歩いた暑い夏

昭和55年春、私が4年生に進級し水産学第四講座(現水族生理学研究室)に配属された時から、すでに40年の歳月が過ぎた。指導教官である羽生功先生から与えられた研究テーマは、ハゼ科の魚チチブの生殖周期を調べるといったものだった。研究を始めるにあたり、魚はどのように入手したらよいのか、と先生に尋ねたところ、「確か、戸田のポートコースにチチブが居るはずだから、釣りに行きましょう」ということになり、短い釣り竿とバケツをもって先生と埼玉県戸田市に出かけたのは、進級してまだ間もない5月だった。

ポートコースの両側には大学の艇庫が並んでいた。各大学のチームが練習に励んでいる姿を横目で見ながら、先生と私は体長5cmにも満たないダボハゼ釣りである。ちょっと糸を垂らしては次々と場所を移していくのが釣り人の習性らしく、先生と私はこまめに移動を繰り返していた。しばらくすると、先生はある艇庫の前に停めてある自転車を見つけ、「あれを

借りましょう」と言い出した。あたりには誰もおらず、無断で借りるというのである。それは限りなく自転車泥棒に近い行為であるように私には思えた。私の心配をよそに、先生は「後で返せばいいでしょう」と、まったく躊躇する様子もなく自転車を拝借してしまった。

先生の思惑通り、すぐに20尾ほどのチチブが採集でき、ここで毎月のサンプリングを行なうことになった。釣りは元来好きなので趣味と実益を兼ねたウマイ話だとほくそえんでいたが、夏までは簡単に釣れたチチブが秋になって水温が下がるとまったく採れなくなってしまった。水面をアメンボのように優雅に進むボート部の貴公子たちがとても羨ましく思えた。

修士課程1年の夏、私は羽生先生と霞ヶ浦の湖畔に沿ったアスファルトの道を裸足で歩いていた。頭上から照りつける太陽がアスファルトを焦がし、足の裏が火傷しそうに熱い。再びチチブを探し求めて、霞ヶ浦の岸辺を釣り竿片手に探っていく。草を掻き分け、沼地を横切り、湖水に向かう。途中

で足が沼にはまり込み、勢いをつけて引き上げるとサンダルの緒が切れてしまった。そんな訳で雑貨屋を探し、とぼとぼ裸足で歩いていた。現在の私はその時の先生の年齢をすでに越えたが、記憶の中には霞ヶ浦湖畔を初老の先生と少し後れて歩く若者の後ろ姿が焼き付いている。ふたりとも麦わら帽子をかぶっていたに違いない。



水圏生物科学専攻

金子豊二 教授

Toyoji Kaneko



1982年 研究室旅行(右から金子、羽生先生)



1993年 羽生先生